

古今中國小說小品文精選



東京外國語學校教授 宮越健太郎 校閱
大連高等商業學校助教授 王小原 一雄
大阪外國語學校教師 王之淳 共編著

古今中國小說小品文精選

發行所 外語學院出版部

昭和六年五月一日初版印刷
昭和六年五月十日初版發行（二〇〇部）

古今中國小說小品文精選

◎定價金二圓

著者 小原 一雄

發行者 藤井 嘉作

印刷者 山本 禎男

印刷所 株式會社宗文社印刷所

（東京市牛込區山吹町一九八）

(出文協承認
ア420256)



發行所
配給元

東京市神田區神保町三ノ三
振替東京四五二七三
電話九段二八五九九
東京市神田區淡路町二ノ九

外語學院出版部
日本出版配給株式會社

（文化協會會員番號一〇六〇五〇）

緒言

一、本書は高級支那語學習用として編纂せしものなり。

一、已に習得せる語學の力を以て支那文學を理解する事は支那語學徒にとつて甚だ緊要なるものゝ一つと信ず。支那文學は形式上散文と韻文との二つに分け、散文は更に古文、四六駢儷體、小説に分ち、韻文は古詩、詞賦、樂府、近體詩、填詞、北曲、南曲に分たれ、韻文は文學の最も主要なる部分を占めては居るが、さしあたり取つき易きは散文にして、其の中小説は學習上興味もある。これ本書を編纂したる由縁なり。

一、支那小説の起源は遠く漢以前の傳説、俗語に溯り得れども、小説らしく其の體系を整へたるは唐代なれば、本書は材を唐代より現代に至る各代の著名なる小説の中より取れり。殊に民國物としては小品文をも取り入れたる。

一、時代の順序は民國より唐代へと溯つて配列せり。

一、本書はもと／＼高級程度の學力ある者を目標として作りしものなれば、註解

等は日本語を以てせず、支那語を以てせり。

一 附するに、中國小説の起源及び變遷の一文を以てせり。學習上其の一助とせられんことを望む。

一 本書を以て支那小説の外貌を察知すると同時に、支那文學の一端を捉み得らるれば幸なり。

一 編著者自身淺學菲才なれば、編纂其の他に於て多々缺陷誤謬あるを免れざるへきを以て、大方諸彦の叱正指教を得ば幸甚之に過ぎず。

一 終りに本書の編纂に當り、恩師宮越健太郎先生の高教と御盡力を賜りたることに對し、謹んで深厚の謝意を表す。

昭和十六年十二月

編著者記す。

自序

大連高等商業學校在滿洲商業學校支那語組出身的學生，和大連青年會文部省語學檢定補習班的諸君子，因為他們自己的華語程度較高，對於現有的華語課本總嫌內容太淺，難以滿足他們的求知慾。一方面按我個人的經驗，也以爲與其竟念內容淺鮮的教本，倒不如選些小說念；又加上東京外國語學校宮越健太郎先生和南滿工業專門學校的幸勉先生不斷的從旁鼓勵，於是我纔不自揣量，編了這一本小說選。原計劃早日出版。總以公私事務繁冗，事與願違，一再遲延，直至今日方告完竣，實在抱歉之至！編者知識短淺，謬誤自多，尙乞斯界先進多加指正！

編著者識於大連高商。

古今中國小說小品文精選 目次

緒言.....一

自序.....三

中國小說の起源及び變遷.....一

現代作品

——民國——.....二五

支那民族性（周作人）.....二五

論雷峰塔的倒掉（魯迅）.....二七

女兒節（冰心）.....三三

乞巧 (胡雲翼) 三六

背影 (朱自清) 四三

談酒 (周作人) 四七

北海浴日 (陳學昭) 五一

移家瑣記 (郁達夫) 五四

馬褲先生 (老舍) 六二

北平的廟會 (張玄) 七〇

子孫萬代 (老舍) 七七

前代作品

——清·唐——

八七

老殘——老殘遊記 (劉鶚) 八七

方必開——官場現形記(李寶嘉).....	九二
金 生——七俠五義(俞曲園).....	九六
能仁寺——兒女英雄傳(文 康).....	一六
女兒國——鏡花緣(李汝珍).....	一三
劉老老進大觀園——石頭記(曹 雪).....	一五
范進中舉——儒林外史(吳敬梓).....	一五
細 柳——聊齋志異(蒲松齡).....	一四
羊角哀捨命全交——今古奇觀.....	一七
齊天大聖——西遊記(吳承恩).....	一八
武松打虎——水滸傳(施耐庵).....	一九
長坂坡——三國志演義(羅貫中).....	二〇

勘相公——京本通俗小說……………二七

虬髯客傳——太平廣記（杜光庭）……………三六

謝小娥傳——太平廣記（李公佐）……………四二

——完——

今古

中國小說小品文精選

附・中國小說の起源及び變遷

中國小說の起源及び變遷

中國の小説は文語體の小説と口語體の小説に二大別することが出来る。文語體の小説は先づ漢に源を發し、晋・唐に流行し、明・清に及んだものであり、口語體の小説は其の性質上二つに分け、其の一つは宋元之源を發して明・清に盛になつたものであり、他の一つは五四運動後、新に西洋文明の影響を受けて出來上り現代通行してゐるものである。

處が小説の二字は古くは已に莊子や荀子に見えて居り、莊子は「小説」と「大達」とを對稱し、荀子は「小説」と「道」、又「小家」と「智者」とを對稱して居る。これが後世中國に於ては、清代に至るまで文人が小説を輕視する様になつた原因なのである。此の様に小説の名は已に莊子や荀子に見えては居るけれども、未だ小説の限界が定まつて居らず、どういつたものを小説とするかは指定して居らなかつた。それが漢代になると、桓譚の「新論」に「若其小説家合叢小語、近取譬喻、以作短書、治身理家、有可觀之辭（小説家は殘叢の小語を合し、近く譬喻を取り、以

て短書を作る。治身理家の爲めに觀るべきの辭がある」とあり、又野園は「漢書」藝文志（彼はこれによつて、よく古代學術を整理し、系統づけ、比較的小説を重視して居る様である）の中で小説家の説明として次の如く云つて居る。「小説家者流蓋出於稗官、街談巷語、道聽塗說者之所造也……」（小説家者流は蓋し稗官に出でる。街談巷語、道聽塗說者の造る處である云々）と。稗官は漢代の小官の職名で、碎けた米粉（稗）の様な細かい街談巷説を拾ひ集め、それを上官に報告する意味から出た役目であつた。此處に初めて小説の意義が確定されたわけである。即ち、漢代の小説の意味は民間の傳説、俗説を採集したものだといふことが解る。處で民間の傳説、俗説の源は全て神話による場合が多いからして、中國の小説もやはり其の源は神話から出て來たものといへう。こういった見解を以て先秦に溯ると例の「莊子」、「列子」、「韓非子」、其の他「孟子」、古代の「史書」そういった「經子」、「史」中にも寓言が見られるが、それは大抵當時の傳説である。従つてそれ等の中にも所謂小説なるものを搜し出すことが出来る。又「漢書」藝文志」中の小説目錄中にも周・秦頃の小説の名が見られる（但し原物は傳はつてゐない）。又西漢の著名な學者たる劉向の編輯した「說苑」、「新序」、「列女傳」、「世說」、「百家」等（彼の創作といふが、實はそうではなく前漢以前のものであるといはれて居る）、其の他、神話を豊富に收録してある山海經、周の穆王西遊の故事を記した「穆天子傳」も其の分類と看做される。

漢代は小説成立の時代といはれて居るが、處が此の小説確立せる漢代の作品といふものは現在殆ど傳はつて居らない。傳はつて居るのは魏晉南北朝間に作られたものが最も古いものだといはれて居る。彼の漢代の作とかいはれて居る「神異經」「海內十州記」「漢武洞冥記」「漢武故事」「漢武內傳」、瑣事を雜載した「西京雜記」等は著者の名を漢人に借りたに過ぎず、實は皆、魏・晉・南北朝人の作であるといはれて居る。

中國は古より信巫の風があつて、秦漢の兩代に於ては始皇も、武帝も大變神仙術を好んだ爲、神仙の説は大いに盛となつた。漢人の小説は已に其の影響を受けて居つたのは勿論であるが、六朝の時代になると、更に佛教が中國に傳來し、小乘的因果應報説によつて無數の鬼怪靈異の故事が創立され、それは尙道家や神仙家の妄説により大いに發展したものの如く、所謂小説の中にも大いに影響して居る。此等の中で最初に出現したものは、晉の張華の作とかいはれて居る「列異傳」ださうだが今は已に佚して居る。其の他、晉の王嘉の作といはれる「拾遺記」、于寶の「搜神記」、陶潛の「搜神後記」、祖沖之の「述異記」、宋の劉敬叔の「異苑」、梁の吳均の「續齊諧記」等がある。それから専門に釋氏の因果と應驗とを記した志怪書には北齊の顏之推の作といはれる「冤魂志」等がある。其の他「博物志」「高士傳」「神仙傳」等がある。又歴史小説として注目すべきものに「燕丹子」があり。これは晉の裴啓の撰ともいはれ、又秦以前の古書ともいはれて居る。六朝小

説は全てが瑣雜的記載（雜錄體）になるもので、之を割記小説或は筆記小説とか稱し、整段的敘寫に乏しく、又文學的色彩にかけて屬つた。

處が唐代に入ると詩と共に一變し、奇を搜し、逸を記する風からなほ離れなかつたけれども、此處に始て組織完備し、敘する處の事實は全て甚だ瑰奇となり、描寫も濃摯有趣となり純正なる短篇小説があらはれた。之を傳奇小説といふ、已に述べた如く、未だ六朝時代と同様、奇を搜し逸を記する風からなほ離れなかつたとはいふものゝ六朝時代のいい加減な傳説を録したものに比し、意識的に奇を好み、小説にかりて文才を寄託するといつた特徴が見へ、尙又昔の鬼神を傳へ因果を明らかにするのみで他に何等の意味もなかつたものに比べると甚しく其の趣を異にしてゐる。そして又特筆すべきは、其の内容が戀愛を主とした人情物が勃興して來たことである。要するに、傳奇小説とは筆記小説の一項目が擴大獨立したものと見なすことが出來よう。此等傳奇小説を内容的に分別すると、（一）戀愛故事、（二）劍俠故事、（三）神怪故事、（四）別傳（史外逸聞）の四種になる。左に夫々の有名な作品を列記して見よう。

（一）戀愛故事

霍小玉傳（蔣防作）、李娃傳（白行簡作）、長恨歌傳（陳鴻作）、悲烟傳（皇甫枚作）、離魂記（陳元祐作）、會真記 亦名鶯々傳（元稹作）、章台柳傳（許堯佐作）

(二) 劍俠故事

この種の物を敍寫したものは漢晋の古詩中にも見られるが唐時藩鎮專横であつた爲、人民はひそかに此の種の俠客が出て兇惡なる軍閥を懲罰せんことを希望した爲かういつた小説も亦當時盛に興つたのである。

劍俠傳（段成式作）、紅線傳（楊巨源作）、無雙傳（薛調作）、虬髯客傳（杜光庭作）

(三) 神怪故事

傳奇中の神怪故事は當然六朝の志怪書の影響を受けたものである。併し、昔に比べれば事跡が面白く文章も亦美しく勿論同一視することは出来ない。

柳毅傳（李朝威作）、謝小娥傳（李公佐作）、杜子春傳（鄭還古作）、南柯記（李公佐作）、枕中記（李泌作）、悲烟傳（皇甫枚作）、離魂記（陳元裕作）、その他、「白猿傳」、「周秦行紀」等があり、或は奇物、或は神妖鬼怪それに寓するに戀愛を以てした。

(四) 別傳（史外の逸傳）

海山記（韓偓作）、迷樓記（韓偓作）、開河記（韓偓作）、李衛公別傳（無名氏作）、虬髯客傳（張說作）、李林甫外傳（無名氏作）、東城老父傳（陳鴻作）、高力士傳（郭湜作）、梅妃傳（曹鄴作）、長恨歌傳（陳鴻作）、太真外傳（樂史作）

右四種の傳奇小説の中には例へば「長恨歌傳」其の他の如く重複して擧げてあるものがあるがそれは其の内容からして、どちらにも入れられるものと思ふ。以上のものは全て、唐代小説を集

めた「唐人説書」の中にある。これは清の乾隆の末、陳蓮塘の撰したもので、百六十四種收めてある。

以上の如く小説も唐代に入ると一般文學の發達と共に絢爛の域に達し、文言小説の頂點に達したのである。それに尙文章の結構の上に於ても四六駢儷體があり、小説の上にも多大な影響を與へた爲、文章は美しくなり、且又創作的意識が加へられたものが多くなつた爲、其の事蹟の面白いものが少くないので（内容が空虚であるきらひはあるにはあつたが）、往々後世之に材を取つて戯曲に作つたものが多い。例へば「長恨歌傳」は元曲の「梧桐雨」の源となり、「鶯々傳」によつて元曲の「西廂記」が作られた如きがそれである。それ故、後世それ等の戯曲も傳奇といふ様になつた。

宋代以降になると、所謂白話小説の勃興となり、筆記小説や傳奇小説の如き文言小説はあるにはあつたが、次第に廢れて來た。其の中で主なものゝを擧げて見ると、宋代のものとしては其の初代に李昉が勅命を奉じて監修した「太平廣記」五百卷がある。漢晋から宋に至るまでの各種の小説を充分に搜集してある。志怪書の方面では洪邁の作といはれる「夷堅志」四百二十卷は異事奇聞を集めること極めて廣く、分量に於て古今第一といはれて居る。その他、徐鉉の「稽神錄」、吳淑の「江淮異人錄」等がある。又唐の傳奇小説の流をくんだものでは樂史の「綠珠傳」、「楊太真外

傳」秦醇の「趙飛燕外傳」、「驪山記」、「溫泉記」、「譚意歌傳」等があり、尙先に唐の傳奇中別傳に擧げた「開河記」、「迷樓記」、「海山記」等も實は宋代のものだといはれて居るが、其の他のものに於ても時代的區別の曖昧なものは相當に多いものと思はれる。

唐宋人の單行本も明初になると大部分は亡失し、「太平廣記」の如きも大變少くなつて居る。明代に於て著名なものとしては瞿佑の「剪燈新話」がある。これは怪談小説集で、これも唐の傳奇の影響を受けたものである。嘉靖間には唐人の小説再びあらはれ其の編成叢集する者も多くなつた。此の風は清代に入つてもなほ衰へなかつた。

清代に入つて傳奇專集の最も有名なものは蒲松齡の「聊齋志異」であり、其の外これと同派の作品も相當にあり、相當に廣まつたが佳作といふまでには行かぬ。尙清代に於ては此等傳奇物と相對して筆記小説も甚だ流行し、紀昀の「閱微草堂筆記」は其の第一におすべきものであり、敘事文として傑出して居る。其の他陳球の「燕山外史」は駢體文として有名である。其の他は略することにする。之を要するに、清末に至るまで此等文言小説は尙流行したにはしたが作風も次第に卑下し、宋以後のもので文學的價值のあるものでは、むしろ白話小説にあると思はれる。

白話即ち口語を以て文を綴るといふ風は佛教が中國に輸入され、それを民衆の間に佈教する爲に釋典を譯するに口語を以てしたことから影響を受けて居る。そして已に唐代の文言小説の中に